

短期留学生の日本語能力に関する自己上達感

— 台湾人留学生の場合 —

孫 毅 權

大学院教育学研究科特別聴講学生

銘傳大學應用日語研究所

山 本 広 志

地域教育文化学部生活総合学科

(平成20年10月1日受理)

要 旨

本研究では台湾人短期留学生8名を対象にアンケート調査と半構造化面接を行い、第二言語としての日本語の使用に対する不安と自信の関連、言語的な上達感がどうやって生まれどうやって変化するのかなどについて調べた。その結果、殆どの学習者は日本に来たばかりの時、日本語の使用に対する不安を持っている傾向があった。しかし必ずしも不安があることで自信が失われる訳ではないことが学習者の語りから明らかになった。また、日本語が上達しているという感覚を持つことが学習の上で重要だということが伺える。たとえ日本にいても母語で済むことが多いと日本語の使用に対する自信がなくなるなど、第二言語を使う教室外環境の重要性も明らかになった。さらに日本語が上達したと実感している一方で、他人を意識し過ぎるなどの要素があれば短期留学を経験しても日本語に自信がないという学習者がいることも分かった。

§ 1 はじめに

台湾から日本への留学生数は4千人台で頭打ちの傾向にあるが、¹⁾このうち短期留学生の比率は年々増加して1割を超えるようになった。短期留学とは、主として大学間交流協定に基づき1年以内の期間日本の協定校に留学し留学期間終了後は母校に戻る制度をいう。

高は、台湾において日本への短期留学を実施している日本語学科の学生たちを対象にアンケート調査を行った。²⁾その結果から、留学経験者にとって最も重要な短期留学の動機は「日本語能力の向上」であった。そして短期留学の成果は、「日本語を話す勇気を身につけた」「日本語がうまくなった」が挙げられる。また短期留学プログラムの利点については、「日本語が使われている環境にいたので、日本語能力が自然に向上する」という意見が多かった。³⁾短期留学を経験した学生たちは、日本語能力に対する自信が留学する前より強くなる傾向が見られる。

元田は、上達感は自信の一つとして捉えることができると述べた。また、上達感は「自分は上達している」という過去から未来までへと継続する感覚を主としている、すなわち上達感にはある程度の期間を要し、「過程」を重視していると述べた。⁴⁾

日本語の自信について羅は、学習者は目標言語話者が示す「通じる」という態度を感じることを通して、「言語的な自信」を確立していることが観察されたとしている。従って、「言語的な自信」の形成には目標言語話者がコミュニケーションの中で示した態度が重要だと指摘する。³⁾

またClementらは母語の持続力が低い時は高い時より第二言語との接触の機会が多いと述べ、またこれは直接第二言語に対する自信に影響を与えることを統計的な手法により明らかにした。⁵⁾

富阪は、留学生面接調査の結果分析により上達について大半の学習者にとってはコミュニケーション能力の獲得が最大の関心事であることを明らかにした。⁶⁾

また守谷は、第二言語の学習過程では人・物などあらゆるものを含めた学習者を取りまく環境との関わりが大きな役割を果たし、それらとの関わりの中で学習者は言語使用経験を重ねスキルを発達させていくと述べている。⁷⁾

一方不安については、以前から教室内の第二言語不安と第二言語習得との間に負の相関があることが知られている。^{8, 9)}

元田は日本語学習において教室外の不安を考慮し、日本国内における日本語学習者を対象とした日本語不安尺度を調査した。第二言語不安は根本的には他者を意識することによって生じる不安であることから、「対人不安」の一種であると考えられる。調査結果から日本語不安は「対人不安」との間に正の相関関係があり、また日本語不安は「日本語の自信」とは負の相関関係にあることが示された。¹⁰⁾

§ 2 研究方法

2.1 研究目的

短期留学生を対象とした従来の調査結果では、留学し日本語がうまくなったという感想がよく見られる。^{2, 11)} しかしながら、どのように日本語がうまくなったかという上達の過程は言及されていない。そこで本研究では、目標言語の環境における短期留学生の不安と日本語の使用に対する自信の関連、言語的な上達感がどうやって生まれどうやって変化するのかなどについて考察したい。

2.2 調査方法

まず短期留学生の日本語の使用と第二言語の環境に置かれることに対する不安と日本語能力に対する自信についてアンケートを行った。次にその結果に基づきインタビューを行い、日本語の使用に対する自信と留学生活に関する質問をした。インタビューでは半構造化面接¹²⁾を行った。

調査対象者は台湾の大学で日本語を専攻し、日本への短期留学に参加した学部3年生の台湾人8名である。このうち6名は私立X大学（東京近郊）に半年間（2007年9月～2008年2月）留学し、2名は私立Y大学（地方小都市）に1年間（2007年9月～2008年8月）留学した。本調査は2007年11月から2008年3月にかけて行った。（表1）

表1 調査概要

調査協力者	実施時期及び内容
X大学 短期留学生6名 (留学期間半年)	1回目：来日から3ヶ月目 2007年11月中旬に電子メールによるアンケートを実施し、その結果に基づいて12月中旬にインターネットの音声チャットによるフォローアップインタビュー。
	2回目：来日から6ヶ月目 2008年1月26、27日に対面インタビュー。
Y大学 短期留学生2名 (留学期間1年)	1回目：来日から3ヶ月目 2007年11月中旬に電子メールによるアンケートを実施し、その結果を踏まえて12月中旬にインターネットの音声チャットによるフォローアップインタビュー。
	2回目：来日から6ヶ月目 2008年3月26日に対面インタビュー。

1回目の調査では教室内外での留学生の日本語の使用に対する不安、日本語の学習歴、日本語の能力に対する自己評価についての設問を作り、来日3ヶ月目に電子メールでアンケートを実施した。(附録1～2) その後アンケートの回答を踏まえてインターネットの音声チャットを使ったフォローアップインタビューを行った。回答の使用言語は日本語あるいは中国語とし、調査対象者の選択に任せた。

またフォローアップインタビューでは、来日してから留学先大学での勉強と日本語の上達の関連、台湾人以外の外国人との交流、現在の日本語能力に対する自己評価などの質問を加えた。学習者の日本語の使用に対する自信がどのように生まれるのかという過程を探るためインターネットの音声チャットを使い約1時間半の半構造化面接を行った。

2回目の調査は来日6ヶ月目に日本語に対する考え方や日本語能力に対する自己評価を中心に学習者の留学先で40～90分の対面による半構造化面接を行った。(附録3) 面接は調査対象者の許可を得て録音し後日文字化した。面接の際には中国語を使用した。X大学の場合は留学期間が半年で終了するため、短期留学を振り返る質問も行った。Y大学の場合は調査時点でまだ半年の留学期間が残っており、留学の振り返りについては問わなかった。

なお、本研究で使う「不安」とは日本語の使用に対する不安を意味し、「自信」とは日本語の使用に対する自信を意味するものとする。また「上達感」とは、「自分は上達している」という過去から未来までへと継続する感覚¹⁰⁾とし、「第二言語環境」とは日本を指す。

§3 結果及び検討

3.1 不安と自信の関係

来日したばかりの時は日本語しか使用しない環境において多くの留学生が不安を感じているが、不安感は日本語の上達に影響を与える可能性がある。学習者の日本語の使用に対する不安及び自信について1回目の調査結果を表2にまとめる。

表 2 日本語の使用に対する不安と自信

			来 日 前	来 日 直 後	3 ヶ 月 目
X大学 学習者A	不安の有無	教室内		ある	あまりない
		教室外		ある	ある
	自信の有無		ある	ある	ない
	理 由		成績が悪くない。日本人先生の授業が理解できる。	同左	他者を意識しすぎる
X大学 学習者B	不安の有無	教室内		非常にある	あまりない
		教室外		非常にある	軽減傾向
	自信の有無		不安・自信並存	ない	ない
	理 由		聞き取りと話す能力がよくないが、多分分かるかなと思っている。	生活用語などが使いにくいと感じる。	テレビの不理解
X大学 学習者C	不安の有無	教室内		非常にある	非常にある
		教室外		軽減傾向	少なからずある
	自信の有無		ない	ない	相変わらずない
	理 由		自分は一所懸命勉強しなかったから。	他者を意識しすぎる。	とても他者を意識しすぎる。
X大学 学習者D	不安の有無	教室内		ある	ない
		教室外		少しある	あまりない
	自信の有無		ない	ない	少しある
	理 由		聞き取りがよくない。	自分の考え方がちゃんと伝えられない。	聞き取りの上達
X大学 学習者E	不安の有無	教室内		ない	まったくない
		教室外		少しある	少しある
	自信の有無		ない	あまり考えたことはない。	相変わらずない
	理 由		自分より日本語が上手な人がたくさんいるから。		自分の考え方がちゃんと伝えられない。
X大学 学習者F	不安の有無	教室内		ある	あまりない
		教室外		ある	ある
	自信の有無		ない	少しある	ある
	理 由		日本語っばくない日本語を使って、ただ覚えるだけ、生活で応用していない。	簡単な会話なら勉強したことがあるから、大丈夫。	段々慣れてくるから、そんなに不安・心配をあまり持っていない。
Y大学 学習者G	不安の有無	教室内		ある	
		教室外		ある	
	自信の有無		ない	あまりない	あまりない
	理 由		下手だと思って、口を開けて日本語を話すのは怖い。	自分の考え方がちゃんと伝えられない。	まだ日本語でうまく話せない。
Y大学 学習者H	不安の有無	教室内		まったくない	
		教室外		あまりない	
	自信の有無		どちらとも言えない。	少しある	あまり考えたことはない。
	理 由		書くのが下手と思っている。	会話能力は別に心配していない。	自分の目標に達していないから、まだ下手だと思っている。

学習者A、B、Cの日本語不安は「日本語の自信」との関係について元田が示したように、¹⁰⁾自分の日本語に自信がない学習者は日本語の不安が高い傾向にある。まず学習者Aは日本に来たばかりの時不安を感じる一方で同時に自信を持っていたと語った。しかし3ヶ月を経て、自信が失われる傾向にある。また学習者Cは来日してから3ヶ月目の時点で依然日本語に不安があり、自信を持てずにいる。2人は「日本に来て他の日本語学習者に接して自分の日本語がまだ足りないと思い始め、自信がなくなった」と語った。つまり学習者A、Cにとって日本語不安は「日本語の自信」と相反の関係にあり、また他人を強く意識することによる「対人不安」とも関係すると考えられる。

学習者Bは日本語に対する自信について「留学前に少し自信があった」と述べるとともに「日本語の環境においてもおそらく大丈夫だろうと感じていたが、日本に来てから数日後生活用語などの使用が難しくて分からない時もあり、自信がなくなった」と語った。学習者Bの日本語不安は「日本語の自信」と相反の関係にある。

学習者Dは「日本に来たばかりの時日本語に不安があり、自分は2年間日本語を勉強しているにもかかわらず自分の考えをちゃんと相手に伝えることに自信がなかった」と語った。しかしながら3ヶ月目には日本語への不安が殆ど見られずまた自分の日本語が少し良くなったと感じていた。不安が軽減し、日本語に対する自信が生まれたと言えるだろう。学習者Eは来日してから3ヶ月目まで不安はあまり見られず、日本語に対する自信もあまりないと思っている。

学習者Fは日本に来たばかりの時不安を感じる傾向が見られたが「自分の日本語に少し自信があった」と答えた。そして「日本で3ヶ月間過ごし日本語への不安が少し減り聞き取りと話す自信がついたように感じられる」と語った。学習者Fは元田が指摘した日本語不安が「日本語の自信」と相反の関係にあるということと必ずしも一致しない。

地方にいる学習者Gは来日してから3ヶ月間の教室内外での不安について「自分が日本語を表現することに不安があるのであまり自信がないと思っているが、日本語に対しては自分が進歩している」と語った。また他者の考えは気にしなかったと言った。

学習者Hの場合、3ヶ月を経て教室内外での不安は見られないが「自分の日本語がまだまだ下手だ」と語った。

以上のように殆どの学習者は日本に来たばかりの時に不安を持っている傾向がある。しかし、必ずしも不安があることで自信が失われる訳ではないことが学習者の語りにより明らかになった。

3.2 自信、上達感に関して

元田は上達感は自信の一つとして捉えることができると述べている。⁴⁾しかし今回の調査結果からは上達感及び日本語の使用に対する自信には違う要素があるということが分かった。2回目の調査結果を表3にまとめる。学習者全員が聞き取りや話す能力の向上を日本語の上達感の根拠として挙げている。具体的には「相手とコミュニケーションができて嬉しい」「毎日日本語を耳にすることで、聞き取りが進歩し、そして自分が気楽に話せるようになった」「自分ができるという実感から、自分の日本語が上達していると思う」といった意見が示された。

しかし上達していると感じる一方で必ずしも日本語の使用に対する自信が強まっている

訳ではない。学習者A、Cの場合を見ると2人は他人を意識し過ぎることによって比較相手との日本語能力の差に気づき、自分の日本語の使用に対する自信を持てずにいる。また学習者B、Eの場合は「自分は自信がないタイプで、まだ自分の目標に達していないので自信がない」と述べた。学習者Bは6人の中で成績が一番良く唯一奨学金を受けて日本に留学して来た。他の5人は皆学習者Bの日本語が上手だと認識している。一見このようなタイプの学習者は留学によりより一層自信を持ち得ると思われるが、インタビューの結果では逆に自信を失っていた。

一方、学習者Fは日本語の使用に対する自信について肯定的な意見を述べた。学習者Fは6人の中で外国人との交流が一番頻繁に行った。学習者F自身も「外国人との交流により、自分が上達していると感じ、前より気楽に話せるようになったことで、日本語も積極的に勉強したいと思った」と語った。

表3 上達感と日本語の使用に対する自信（6ヶ月目）

	上達感やその根拠	自信の有無やその根拠
X大学 学習者A	<ul style="list-style-type: none"> ・毎日日本語を耳にすることによる聞き取りの進歩。 ・相手とコミュニケーションができた。 ・テレビ、新聞の理解。 	<ul style="list-style-type: none"> ・他者と比較して、自信がない。
X大学 学習者B	<ul style="list-style-type: none"> ・相手とコミュニケーションができた。 ・発話しやすくなった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ドラマや映画の日本語が分からず、自信を失った。 ・自分の目標に達していない。
X大学 学習者C	<ul style="list-style-type: none"> ・日常生活の会話が大丈夫な気がした。 ・聞き取りの進歩。 ・相手とコミュニケーションができた。 ・漫画の理解。 	<ul style="list-style-type: none"> ・他者と比較して、自信がない。 ・自分は積極的に勉強しなかった。 ・緊張しやすい性格を持っている。
X大学 学習者D	<ul style="list-style-type: none"> ・毎日日本語を耳にすることによる聞き取りの進歩。 ・クラスで発言の頻度が多くなる。 ・テレビ、新聞の理解。 	<ul style="list-style-type: none"> ・相手とコミュニケーションができたから、自信が生まれた。
X大学 学習者E	<ul style="list-style-type: none"> ・毎日日本語を耳にすることによる聞き取りの進歩。 ・相手とコミュニケーションができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・性格に自信がない。
X大学 学習者F	<ul style="list-style-type: none"> ・カナダで知り合った日本人の友人とコミュニケーションができた。 ・日本人からの褒め。 	<ul style="list-style-type: none"> ・発話の量が多くなる。 ・テレビの理解。
Y大学 学習者G	<ul style="list-style-type: none"> ・授業を理解することで、相手との交流の増加 ・アルバイトを始めて、相手とより多くのコミュニケーションを取れた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・相手とコミュニケーションができた。 ・他者から自立するようになる。
Y大学 学習者H	<ul style="list-style-type: none"> ・前より日本人つばい話し方ができるようになった。 ・聞き取りの進歩。 ・日本人との交流。 	<ul style="list-style-type: none"> ・聞き取りの進歩。

3.3 第二言語環境と人的ネットワークが日本語の上達に与える影響

留学生の人的なネットワーク¹⁹⁾と第二言語に置かれる環境は日本語の進歩と関連があると思われる。羅は留学生の人的なネットワークについて、短期留学は目標言語の使用頻度や目標言語話者との接触が多くなり言語学習に有効だとしている。³⁾

調査結果から、X大学の留学生はあまり日本人学生と一緒に授業を受けなかったようである。クラスでも大体同じ出身国の人と付き合うことが多く、外国人とあまり交流しない傾向がある。また地元地域との交流、日本文化の情報、外国人留学生との交流が少ない。X大学の台湾人留学生が住んでいるアパートは全て中国語環境なので、教室外で日本語を使用する必要性が低く、そのことが日本語の上達に影響を与えているのではないだろうか。調査結果からX大学の6名の学内外での人的なネットワーク形成が容易とは言えないことが伺える。

逆にY大学の学習者G、Hは台湾からの留学生が2人だけの環境にあり、主に日本人と交流している。2人は日本人との人的なネットワークが形成され、自分の日本語の上達感と日本語の使用に対する自信について「日本人と友達ができ、自分の日本語が段々うまくなってきたと実感した」といった肯定的な意見を述べている。

つまり日本語の学習に影響を及ぼす要因の一つとして学習者の置かれる環境が重要だと考えられ、このことは学習者自身も認識している。例えば学習者Fは「環境は非常に重要なことだと思う。普通は中国語ばかり使って、生活で頻繁に使われる用語はあまり勉強していなかった。私にとって、環境は重要で、努力も必要だ」と言った。また、学習者C、D、Eは「いつもほかの台湾の大学出身の留学生と付き合ったら、日本語の上達に影響を与える」と思っている。そして、学習者Hは「東京に留学しても、あまり日本人の友達を作れないというような話を前聞いたことがあるから、東京に行きたくなくなった。」と語った。

3.4 日本語の授業に対する評価

調査対象者8名はインタビューの際に留学先大学での日本語の授業に対する肯定的な評価と否定的な評価を語った。

肯定的な評価は少なく、例えば学習者D、Eは「論文の書き方を勉強してきた」と語った。学習者Gは「日本語能力試験1級を中心にする授業を受けて、日本語の文法の学習に役に立った」と言った。

反対に否定的な評価は多く、学習者A、Eは「ここ(X大学)での勉強は大体台湾で勉強したことがあるから、あまり勉強にならない」と語った。また学習者Bは「こっち(X大学)は順序だって教えるのではなく、その時その時でバラバラに教えるため、理解が難しい」と言った。さらに学習者Dは「学校が楽し、何か学びたいけど、勉強にならない」と語った。学習者Fは「会話授業のほかに、ほかの授業は役に立たなかった。担任教師が責任を取らなかった気がした」と語った。学習者Hは「学校ではあまり勉強にならなかった」と言った。「殆どの授業はやさしく、勉強しなくてもいい、そして今まで大学で勉強してきた日本語能力を活かし、日本で上達を試みても学校の勉強は日本語の能力にあまり役に立たなかった」という意見を述べている。

元々短期留学制度は、他国の大学等における学習、異文化体験、語学の習得などの多様

な学習を目的にしているが、今回多くの学習者はこれについて残念だと言った。

学生のみ意見をもとにすることはできないが、授業の進度が合っていない場合があることや人的ネットワークの構築が困難な環境があることは伺える。留学生の意見を参考にして短期留学のプログラムをなお一層向上させる必要があるだろう。

§ 4. まとめ

日本の大学に留学した学部3年生の台湾人短期留学生8名を対象にアンケート調査と半構造化面接を行い、次のことが分かった。

- (1) 留学生は、短期留学を通して聞き取りと話す能力が上達していると感じている。
- (2) 多くの留学生は最初来日した時日本語の使用に不安を感じて自信を失った。しかしその後日本語への不安が軽減したにも関わらず依然として自信を持っていない学習者もいることが分かった。
- (3) 日本語の上達のためには自己上達感を実感することの重要性に加え、教室外の第二言語環境の重要性も浮き彫りになった。
- (4) 日本語の自己上達感を実感する一方で、他人を意識し過ぎ日本語に対する自信を失ったという学習者も見られた。
- (5) 留学先大学での日本語の授業の難易度が短期留学生の日本語力に合致していない状況が見られた。

謝辞

内海由美子准教授の有益な助言に感謝する。本研究は山形大学教育研究基盤校費及び筆者らの私費によって行われた。

文献

- 1) 文部科学省編『平成19年度文部科学白書』(2008).
- 2) 高凡晴「台湾の日本語学科における短期留学プログラムについての考察 ―その現状及び問題点を中心に―」銘傳大學修士論文(2005) 47-53.
- 3) 羅曉勤「短期留学生の自己イメージ (self-image) の変化と日本語学習との関係」『銘傳日本語教育』第7期(2004) 46-66.
- 4) 元田静「初級日本語学習者の上達感を促す試み:ポートフォリオを用いて」『東海大学紀要留学生教育センター』25(2005) 69-81.
- 5) Clement R, Baker SC, MacIntyre PD「Willingness to communicate in a second language - The effects of context, norms, and vitality」*Journal of Language and Social Psychology* 22 (2) (2003) 190-209.
- 6) 富阪容子「自己評価とメタ認知ストラテジー: 留学生面接調査の結果分析から」『言語と文化』11号(2007) 139-151.
- 7) 守谷智美「日本語学習の動機づけに関する探索的研究 ―学習成果の原因帰属を手がかりとして―」『日本語教育』120号(2004) 73-82.
- 8) Elaine K. Horwitz, Michael B. Horwitz, Joann Cope「Foreign Language Classroom Anxiety」*The Modern Language Journal* 70 (2) (1986) 125-132.
- 9) Peter D. MacIntyre, R. C. Gardner「The Effects of Induced Anxiety on Three Stages of Cognitive

- Processing in computerized Vocabulary Learning」*Studies in Second Language Acquisition* **16** (1994) 1-17.
- 10) 元田静「日本語不安尺度の作成とその検討：目標言語使用環境における第二言語不安の測定」『教育心理学研究』**48** (4) (2000) 422-432.
 - 11) 出原節子「日本留学の成果：留学生は留学経験をどのように評価しているか」『富山大学留学生センター紀要』**3** (2004) 15-21.
 - 12) 中澤潤、大野木裕明、南博文『心理学マニュアル観察法』北大路書房 (1997) 53.
 - 13) 元田静「PB63第二言語(日本語)不安の特質に関する検討」『日本教育心理学会総会発表論文集』42号 (2000) 168.

附録1 1 回目の調査 質問項目 (X大学用)

留学の方々、ご多忙中申し訳ございませんが、下記のアンケートにご協力くださいますようお願い申し上げます。

このアンケートは、研究目的以外には使用致しませんので、ご安心ください。

銘伝大学応用日本語学科修士課程

指導教授 山本 広志 先生

大学院生 孫 毅権

(中国語で回答してもいいです)

1. 今、大学の何年生ですか? ___年生 男性 女性

2. 日本語の学習歴がありますか? ある いいえ
 日本語を勉強したことがある場合は、書いてください(どこ?いつ?何ヶ月間?もし日本語能力試験に合格したら、教えてください)
 例えば: 高校二年生のとき、予備校で一年間日本語を勉強しました。今三級に合格しました。

3. どうして短期留学制度に参加しようと思ったんですか?

4. 留学する前に、自分の日本語能力はどう思っていますか? どうしてそのように思っていますか?

5. これからの半年または一年間において日本で留学生生活をします。今は日本に来一ヶ月間ぐらいなので、いろいろなところがまだ慣れないかもしれません。それに、日本語の環境にいるので、日本語をしか使いません。多分、不安、緊張を持っています。
 そして、以下は場面を設定し、それぞれの質問に対して、答えてください。
 *場面: 教室内
 ・教室で、日本語が間違えないか不安です。
非常にそう思う そう思う どちらでもない そう思わない 全く思わない
 コメント:
 剛 来 時:
 現 在:
 ・先生が早口で日本語を話すと、不安になります。
非常にそう思う そう思う どちらでもない そう思わない 全く思わない
 コメント:
 剛 来 時:
 現 在:

・先生が私の日本語が分からない時、焦ります。

非常にそう思う そう思う どちらでもない そう思わない 全く思わない

コメント：

剛 來 時：

現 在：

・日本語の授業の内容が分からない時、不安になります。

非常にそう思う そう思う どちらでもない そう思わない 全く思わない

コメント：

剛 來 時：

現 在：

・日本語を話す時、日本人の学生に笑われないか心配です。

非常にそう思う そう思う どちらでもない そう思わない 全く思わない

コメント：

剛 來 時：

現 在：

・日本人の学生が私の日本語が下手だと思わないか心配です。

非常にそう思う そう思う どちらでもない そう思わない 全く思わない

コメント：

剛 來 時：

現 在：

・日本語を話す時、ほかの留学生に笑われないか心配です。

非常にそう思う そう思う どちらでもない そう思わない 全く思わない

コメント：

剛 來 時：

現 在：

・ほかの留学生が私の日本語が下手だと思わないか心配です。

非常にそう思う そう思う どちらでもない そう思わない 全く思わない

コメント：

剛 來 時：

現 在：

*場面：教室外

・私より日本に滞在する時間が長い留学生と日本語で話すと、緊張します。

非常にそう思う そう思う どちらでもない そう思わない 全く思わない

コメント：

剛 來 時：

現 在：

・日本語の敬語を話さなければならない時、緊張します。

非常にそう思う そう思う どちらでもない そう思わない 全く思わない

コメント：

剛 來 時：

現 在：

・初対面日本人と会話することに不安を持っています。

非常にそう思う そう思う どちらでもない そう思わない 全く思わない

コメント：

剛 來 時：

現 在：

・私には日本語の会話能力がないだろうか、と心配になります。

非常にそう思う そう思う どちらでもない そう思わない 全く思わない

コメント：

剛 來 時：

現 在：

・国際センターや学生センターの事務職員と日本で話す時、不安になります。

非常にそう思う そう思う どちらでもない そう思わない 全く思わない

コメント：

剛 來 時：

現 在：

・銀行や郵便局や市役所など（口座を作る、外国人登録）の場所で日本語を使うと、緊張します。

非常にそう思う そう思う どちらでもない そう思わない 全く思わない

コメント：

剛 來 時：

現 在：

・お店の人と日本語で話す（苦情をいう、尋ねる）時、不安になります。

非常にそう思う そう思う どちらでもない そう思わない 全く思わない

コメント：

剛 來 時：

現 在：

5. 今、留学する一ヶ月間くらいなので、自分の日本語能力について、自信がありますか？
どうしてそう思っていますか？

剛 來 時：

現 在：

<ご協力ありがとうございます>

附録2 1 回目の調査 質問項目 (Y大学用)

留学の方々、ご多忙中申し訳ございませんが、下記のアンケートにご協力くださいますようお願い申し上げます。

このアンケートは、研究目的以外には使用致しませんので、ご安心ください。

銘伝大学応用日本語学科修士課程

指導教授 山本 広志 先生

大学院生 孫 毅権

(中国語で回答してもいいです)

1. 今、大学の何年生ですか? ____年生 男性 女性
2. 日本語の学習歴がありますか? ある いいえ
日本語を勉強したことがある場合は、書いてください (どこ? いつ? 何ヶ月間? もし日本語能力試験に合格したら、教えてください)
例えば: 高校二年生のとき、予備校で一年間日本語を勉強しました。今三級に合格しました。
3. どうして短期留学制度に参加しようと思ったんですか?
4. 留学する前に、自分の日本語能力はどう思っていますか? どうしてそのように思っていますか?
5. これからの半年または一年間において日本で留学生生活をします。今は日本に来た一ヶ月間ぐらいなので、いろいろなところがまだ慣れないかもしれません。それに、日本語の環境にいますので、日本語をしか使いません。多分、不安、緊張を持っています。そして、以下は場面を設定し、それぞれの質問に対して、答えてください。
*場面: 教室内
・教室で、日本語を話す時、不安です。
 非常にそう思う そう思う どちらでもない そう思わない 全く思わない
コメント:
・教室で、日本語間違えないか心配です。
 非常にそう思う そう思う どちらでもない そう思わない 全く思わない
コメント:
・先生が早口で日本語を話すと、不安になります。
 非常にそう思う そう思う どちらでもない そう思わない 全く思わない
コメント:
・先生が私の日本語が分からない時、焦ります。
 非常にそう思う そう思う どちらでもない そう思わない 全く思わない
コメント:

・日本語の授業の内容が分からない時、不安になります。

非常にそう思う そう思う どちらでもない そう思わない 全く思わない
コメント：

・日本語を話す時、日本人の学生に笑われないか心配です。

非常にそう思う そう思う どちらでもない そう思わない 全く思わない
コメント：

・日本人の学生が私の日本語が下手だと思わないか心配です。

非常にそう思う そう思う どちらでもない そう思わない 全く思わない
コメント：

・日本語を話す時、ほかの留学生に笑われないか心配です。

非常にそう思う そう思う どちらでもない そう思わない 全く思わない
コメント：

・ほかの留学生が私の日本語が下手だと思わないか心配です。

非常にそう思う そう思う どちらでもない そう思わない 全く思わない
コメント：

* 場面：教室外

・私より日本に滞在する時間が長い留学生と日本語で話すと、緊張します。

非常にそう思う そう思う どちらでもない そう思わない 全く思わない
コメント：

・日本語の敬語を話さなければならない時、緊張します。

非常にそう思う そう思う どちらでもない そう思わない 全く思わない
コメント：

・初対面日本人と会話することに不安を持っています。

非常にそう思う そう思う どちらでもない そう思わない 全く思わない
コメント：

・私には日本語の会話能力がないだろうか、と心配になります。

非常にそう思う そう思う どちらでもない そう思わない 全く思わない
コメント：

・国際センターや学生センターの事務職員と日本で話す時、不安になります。

非常にそう思う そう思う どちらでもない そう思わない 全く思わない
コメント：

・銀行や郵便局や市役所など（口座を作る、外国人登録）の場所で日本語を使うと、緊張します。

非常にそう思う そう思う どちらでもない そう思わない 全く思わない
コメント：

・お店の人と日本語で話す（苦情をいう、尋ねる）時、不安になります。

非常にそう思う そう思う どちらでもない そう思わない 全く思わない
コメント：

5. 今、留学する三ヶ月間くらいので、自分の日本語能力について、自信がありますか？
どうしてそう思っていますか？

<ご協力ありがとうございます>

附録3 2回目の調査半構造化面接の設問

1. これまで学校での勉強とか生活とかが日本語の学習とどんな影響があったんですか？
2. 日本人あるいは外国人との交流があったんですか？具体的に教えてください。
(どこで知り合いですか？どんなことをしますか？など)。
3. 留学前と比べて、今の自分は何か変わったことがあるですか？
4. 今の自分は日本語に対する考え方はなんですか？どうしてそう思っていますか？
5. 今、自分の日本語能力はどう思っていますか？その原因は？

(質問3と4はX大学のみ)

Summary

SUN Yi-Chuan, YAMAMOTO Hiroshi :
Satisfaction from Taking Short-term Japanese Courses in Japanese
Taking Taiwanese Students as an Example

The subjects of this study are 8 Taiwanese exchange students for short-term study in Japan. The study focused on analyzing the relations between their anxiety (of using Japanese) and self-confidence, and the birth and the development of the progress of mastering Japanese as a second language through questionnaires and semi-structured interviews. The result showed that most students were uncomfortable using Japanese when they first arrived in Japan. However, it can be seen from the students' interviews that discomfort did not equal a lack of confidence. It can be seen that it was important to feel that there is "progress in the language". Even when they were in Japan, if they used their first language too often, they would lose confidence in Japanese. The external environment of the classroom was also very important. Although they felt that they have made progress in Japanese, they still did not have confidence in the language, despite the fact that they study aboard, as they paid too much attention on what others think.